

スポーツクラブ人国記 (3)

剣道部

剣道部の創部は明治38年（1905年）で来年で創部110周年を迎え、今年の3月までに合計571名の卒業生を出している。明治38年と言えば、その前年に始まった日露戦争が終結した年でこの年の日本海海戦で日本連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を撃破して日本を勝利に導いた年である。東洋の一小国であった日本が世界の舞台に登場していく契機となった時代であった。

この年以降剣道部の活動が始まるが、戦前は昭和初期のI期黄金時代（昭和6年前後）、戦争前のII期黄金時代（昭和14年前後）は強豪大阪商大の名を世に知らしめた時代であった。新聞紙上の予想記事でも優勝候補の一角として紹介されていた。当時、最も権威のあった京都帝大主催の全国高専剣道大会・明治神宮体育大会（現在の国民体育大会）・全日本中等学校剣道・全日本学生・大学高専大会などの各種大会で大活躍した。

この間、昭和6年にはOB会組織である剣友会（当時は後援会と称した）が設立され、現役・OB一体となった

基盤が出来上がった。また、昭和9年には三商大戦が発足し、戦争の影響での一時的断絶があったものの今日まで長い歴史を誇っている。

戦後になり、昭和30年に剣道部が復活しこれに呼応して剣友会も体制を整え、部に対して物心両面からの強力な支援活動を開始した。昭和33年には旧三商大戦が復活し現在に至っている。昭和41年には浮浪者の放火による道場の焼失それに伴う防具類の消滅という大災難に見舞われたが、関係各位の支援のもと剣道部・剣友会一丸となつての取り組みにより立ち直ることが出来た。

今日においては、強豪私学の壁が厚く戦前のように活躍することは難しい状況にあるが旧三商大戦の優勝・全日本学生剣道選手権大会出場を二大目標として稽古に励んでいる

△戦前▽

まず一番に登場するのが大正11年卒の松下武男だ。松下は学生時代校則により出場禁止になっていたにもかかわらず本名で試合に出場。その試合で大活躍し翌日の新聞に載つたため停学処

分となったが、堂々と本名で出場した男気が当時の学長に気に入られ大阪ガスへの就職を世話してもらつたというエピソードを持つ。大阪ガスでは剣道部を創設し主将として活躍。その後大和ガス器具株式会社を設立してその経営にあつた。昭和6年の剣友会設立時より幹事として名を連ね第2代会長

を昭和32年から15年にわたり務め戦後の剣道部の復活を支えた。特に、昭和41年の火災による道場焼失時には多額の浄財を提供し剣道部の危急存亡の危機を救った。剣道部にとつての大恩人である。このため、昭和46年より剣友会ではその功績を称えその名を永く伝えるため「松下賞」を制定し毎年部員の中から優秀者一名を選んで表彰している。

次に登場するのが昭和7年高商卒の安原守規だ。安原は各種全国大会で大活躍し昭和第一期黄金時代を築いた名剣士で特に明治神宮大会（今の国民体育大会）大学・高専の部で準優勝し大阪商大の名を全国に知らしめた。卒業後安原産業を設立し、その経営に当たるかたわら戦後剣道部の復活時より母校へ率先して来校し、学生たちの指導に力を注ぎ、剣友会の幹事長第3代会長を務め剣道部の再建に尽力した。また、地元において天王寺剣友会の設立

など地域の剣道の普及発展を図るとともに昭和36年大阪学生剣道連盟の創立時には副会長を務め戦後の学生剣道の復興育成に多大な功績を残し、平成8年に全日本剣道連盟より「剣道有功賞」を受賞した。このように生涯剣道を貫き剣道教士七段・居合道範士八段を受称している。

ここで昭和第二期黄金時代について触れてみたい。昭和14年を中心にその後一、二年の大阪商大剣道部は素晴らしい活躍をしている。昭和13年の三商大戦の優勝を始めとして各種の大会で優勝・準優勝・上位進出の好成績を収め大阪商大の名は全国に知れ渡つた。この時代に大活躍した昭和15年学卒に西山大典・森山克己がいる。さらに昭和16年学卒に森田忠がいる。

西山は同級生によると「彼の学生生活は即剣道生活であった。彼のカレッジライフから剣道を除けば何も残らない」と言わしめるほど剣道に打ち込んでいた。昭和13年には外務省が招聘した全国学生武道使節団の剣道の部で全国6名に選抜され、2か月に亘ってドイツ・イタリアの主要都市を歴訪し大阪商大の名を高めるとともに帰国後さらに一段と大活躍した。

森山は卒業後大和紡績に入社し力量を発揮しその後社長に就任し繊維業界

で大活躍した。一方、剣友会の会合には絶えず顔を出し母校剣道部に対する愛情は誰にも負けないものがあつた。

森田は当時の大学剣道界では知らぬ人がいないという剣豪であり、昭和14年の全日本学生剣道連盟による大陸派遣武道使節団の一員として朝鮮・満州へ遠征した。戦後は常に剣友会の中心的人物であり学生部員に対する稽古指導はもとより、剣道に対する姿勢及び剣道上達の心構えなど精神面での伝授指導に務めた。また、関西学生剣道連盟・大阪学生剣道連盟の役員・審判員を務め学生剣道の発展に尽力した。

昭和17年学卒の松本良諄は主将として真正面からの正攻法の豪快な剣道で大活躍した。卒業後福島紡績（現在のシキボウ）に入社し、その後軍務に服したのち会社で復帰し業務に手腕を發揮して昭和46年に社長に就任するとともに日本紡績協会会長も歴任した。また、戦後剣道部の復活に伴い剣友会の活動にいち早く参加。幹事・幹事長を務め剣友会誌「百錬」の編集・発行をはじめ財政基盤の充実に取り組むなど、剣道部・剣友会にとってなくてはならない存在であった。この間、率先して学生の指導に当たるとともに自らも剣道の修練に励み剣道範士七段を取得した。さらに、全日本剣道連盟副会

長（12年間）・全日本学生剣道連盟会長（6年間）・大阪府剣道連盟会長（18年間）などを歴任した。全日本剣道連盟副会長在任中の平成8年には天皇杯全日本剣道選手権大会においてご観覧された天皇后両陛下に対する説明役の大任を果たした。同時に、この大会では我が校の小林三留師範（後述）が大会審判長を務められ剣道部員、剣友会員一同大変な感動であった。このように松本は日本剣道界の重鎮であり平成19年には全日本剣道連盟より剣道の最高の榮譽である「剣道特別功労者表彰」を受賞した。この賞は、平成4年から設けられこの時までの受賞者はわずか6名でこの賞の大きさと重みを痛感する次第である。

昭和19年学卒の岡田正巳は卒業後、大阪金属工業（現在のダイキン工業）に入社し系列会社の社長を務めた。戦



天皇后両陛下への解説役を務める松本良諄（皇后陛下の隣り）、小林三留師範が審判長

後剣道部の復活に伴い剣友会活動に参加し昭和56年より幹事長・平成7年より後第5代会長を務め、剣道部への支援体制の充実に尽力した。また、自らも昭和56年に始まった旧制高専剣道大会などの大会に積極的に参加し、平成4年の第14回大会では団体に準優勝に導いた。さらに、大阪学生剣道連盟の副会長や理事長を歴任（現在は顧問）、学生剣道の振興に多大に寄与し、平成16年には全日本剣道連盟より「剣道有功賞」を受賞した。現在90歳を超えるが今なお剣友会総会や学生剣道大会に顔を見せ、卒業生・学生たちに剣道を通じての「千古変わらぬ友の情」の精神を身をもって示している。

△師範▽

ここで、大阪商大・大阪市立大学の師範について振り返ってみよう。剣道部創設の明治38年の初代の高見佐三郎師範から現在の小林三留師範まで9名の方々にお世話になっている。大正9年より指導を仰いだ越川秀之介師範は昭和8年の明治神宮専門家剣道大会において優勝し、剣道界において名人と謳われ戦後初代の大府警本部の首席師範を務められた。その関係で戦前から戦後にかけて大阪府警から指宿鉄盛・六反田俊雄・小林嶺造師範の指導を戴きまわった恵まれた環境にありこ

のお蔭で戦前の黄金時代が築けたと言える。戦後になって片岡茂師範も加わりもつたような顔ぶれの師範を仰ぎ大阪市大剣道部がいち早く全国大会への出場し、三商大戦優勝を成し遂げられたのも先生方の献身的な指導のお蔭だった。その後、小林嶺造師範・その子息の小林三留師範はいずれも大阪府警本部の首席師範を務められた。現師範の小林三留師範は第1回世界選手権大会優勝・全国警察官剣道大会優勝・明治村剣道大会（全国から選抜された八段以上の剣士による大会）優勝などの輝かしい経歴の持ち主であり剣友会員・剣道部員の誇りである。

△戦後▽

戦後のトップバッターとして昭和28年学卒の岡田幸雄が登場する。岡田は在学中は剣道・柔道が禁止されていた時代であったためボート部に在籍していたが、卒業したのち剣道部復活（昭和30年）後からは営業マンとしての仕事のかたわら剣道部の練習に日参するようになり、前述の師範・先輩方の指導を仰ぎ精進しその結果平成22年には満80歳にして剣道教士七段を取得した。また、昭和54年に始まった旧制高専剣道大会には第1回から出場し平成8年の第18回大会では団体3位に入賞を果たした。今もなお学生達と一緒に

に練習に汗を流し、生涯剣道を実践、平成24年には大阪府知事から「生涯現役スポーツ賞金賞」を受賞するなどその剣道にかける情熱には敬服の他はない。この間、関西学生剣道連盟、大阪学生剣道連盟の役員・審判員を歴任、学生剣道の振興に尽力した。

昭和32年商卒に佐竹完治がいる。昭和30年に剣道部は学生たちの熱意と剣友会の先輩たちの物心両面の支援により復活したがその中心となって動いたのが佐竹だ。戦後剣道部の初代主将で、当時一部で剣道に対する冷たい目もあったが、持ち前の情熱によりこれを克服していった。卒業後シキボウに入社して活躍しその後多くの剣道部の後輩たちがシキボウに就職するようになる道を切り開いた。

昭和34年文卒の正木清文は剣道部が戦後復活した昭和30年に入社しマネージャーとして奮闘した。先輩たちの支援のもと当時荒廃していた道場の修復・剣友会誌の戦後創刊号の発行など剣道部活動を軌道に乗せるため大変な貢献を果たした。卒業後泉州銀行（現在の池田泉州銀行）に入社し手腕を發揮し常務取締役を務めた。また、剣友会の6代会長を務めその豪放磊落さで大いに後輩たちの面倒を見た。

昭和35年商卒の澤本起夫は剣道部が

復活後本格的に活動が始まった昭和31年に入社した。全員がほとんど素人同然であったが、その後の努力により3年時には全日本学生個人選手権大会に出場し大阪市大の名を全国デビューさせた。また、4年時には全日本学生剣道大会に大将として団体での出場へ導いた。これを契機としてその後の4年連続全日本大会出場し昭和35年の三商大戦の戦後初優勝につながった。卒業後大和証券に勤務し証券マンとして活躍するとともに昭和51年の剣友会東京支部の設立に貢献し3代目支部長を務めた。

昭和41年工・土木卒の湊勝比古は1年時に全日本大会に団体戦で出場し、2年時には三商大戦優勝の中心選手として活躍した。卒業後大学院に進みその後大阪市に奉職。大阪市内の道路橋梁の整備・鉄道の高架化（地下化）、ディアモール・長堀通りなどの地下街建設などのインフラ整備などに取り組み建設局長を経て退任した。平成15年の剣道部創部100周年記念事業では実行委員長を務めその大役を無事果たした。現在、第8代剣友会会長の任にあり母校剣道部の支援に力を注いでいる。

昭和43年卒には商卒の河合照公と法卒の川上満男がいる。河合は大阪の高



昭和38年旧三商大戦優勝（橋大学にて）

し海外事務所長などで活躍した。また、昭和51年の剣友会東京支部設立時に際しては事務方として先輩方を助け大いに貢献した。現在東京支部長の任にあり。

川上は道場焼失時には副主将として河合を助けその明るいキャラクターで落ち込み腑抜けのようになっていた部員一同を叱咤激励し、部員全員でアルバイトによる資金集めを行うなど、部復活に向け大車輪の働きをした。卒業後大阪ガスに勤務し販売促進部門で活躍。その後系列会社の社長・監査役などを歴任した。平成15年から第7代の剣友会会長を務め創部100周年記念事業を成功裏に無事終えた。

校剣道界で活躍し大学入学後もポイントゲッターとして大活躍し1年時に全日本大会に団体戦で出場。4年時には大阪府学生剣道大会で個人戦準優勝などの輝かしい戦績を残している。また、主将時代の昭和41年夏には浮浪者の放火による道場焼失により道場なし・防具なし・竹刀なし・剣道着なしの剣道を志す者にとつて致命的な状態を経験した。この状況に対し部員を束ね剣友会の諸先輩・大阪大学をはじめとする各大学からの応援等関係先からの練習場の提供などの筆舌に尽くしがたいような支援を受け、見事部を立ち直らせその年の秋の三商大戦では優勝の栄誉を勝ち取った。卒業後住友商事に勤務

昭和48年工・電気卒の芝野裕司は入学時より新人離れした活躍で1年時で関西国公立大会の3段以上の部で準優勝した。主将であった三年時には三商大戦で優勝を成し遂げた。4年時の昭和47年には全日本学生個人選手権に出場するとともに大阪府剣道優勝大会大学の部では大将として団体優勝へ導き、次年度の連続優勝につながることもとなった。卒業後松下電工（現在のパナソニック）に勤務し住宅建材の開発部門を中心に手腕を發揮するとともに松下電工を実業団剣道界の雄へと導いた。また、昭和58年より10年間母校校

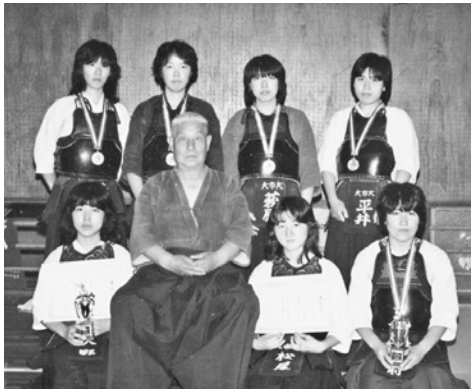
道部の監督を務め、後輩たちの指導・育成に力を注ぐとともに大阪学生剣道連盟の役員・審判員を務めた。

昭和50年工・建築卒の松島清は3年時の昭和48年の大阪府剣道優勝大会大学の部で2連覇を成し遂げたときのメンバーであり4年時の昭和49年には大将として三商大戦での優勝を勝ち取った。なお、この時の優勝以来今日までの約40年間あと一步のところまで行きながら三商大戦で優勝がないのは残念でならない。卒業後昭和設計に入社しその後住友信託銀行（現在の三井住友信託銀行）に転じ、現在大阪駅北側のグランフロント大阪の開発に取り組んでいる。卒業後剣道から疎遠になっていったが、一念発起50歳を超えてから再挑戦し現在六段を取得しさらに昇段すべく練習に励んでいる。また、平成17年の剣道部創部100周年記念事業では事務局長として実質的な取りまとめを行うなど手腕をふるい成功へと導いた。現在、剣友会の幹事長を務めるとともに大阪学生剣道連盟の副理事長として学生剣道の発展に取り組んでいる。

昭和60年理・地学卒に山口久美子がいる。女子部員は昭和52年から今日まで60名の卒業生を出している。昭和56年から平成元年頃にかけての女子の活

躍は素晴らしく、関西学生剣道選手権大会の3位をはじめ大阪府学生剣道大会で団体・個人で3位などの入賞を数度果たし平成元年には団体準優勝を獲得した。この間、昭和58年・59年には全日本女子学生優勝大会に連続出場し全国の強豪と互角の試合を繰り広げるなどまさに女子の黄金時代を築いた。

また、平成18年には25年ぶりの全国大会出場を果たしスポーツ報知に大きく取り上げられた。山口は2年連続全国大会出場当時のメンバーとして活躍した。卒業後大学校等で教鞭をとるかたわら剣道を続け剣友会の幹事として女子会員の世話役を務め、OB・OGの



昭和57年大阪学生女子大会3位入賞と2年連続全国大会出場メンバー（小林嶺造師範と共に）

大会である関西学生連剣友剣道大会へも女子チームの一員として率先して参加している。また、現在大阪学生剣道連盟の役員を務めている。

最後に昭和63年商卒の橋本幸二を紹介する。戦後の大阪市大剣道部の中で最も優秀な成績を残したのが橋本である。大阪学生剣道大会では2年連続で優秀選手に選ばれ、特に4年時には関西学生剣道選手権大会において並みいる私学の強豪校の選手に伍して3位に入賞し、全日本学生個人選手権大会に出場し東西対抗戦にも選抜されるといふ輝かしい戦績を残している。これを超える成績を上げた選手は誰もいない。学生諸君には是非目標にしてほしい先輩である。

（文責 湊勝比古）

× × × × × ×

